

第六章

感覚的であること、全能であること、憐れみ深いこと、感情に流されないことは、そうでないことより善いことです。では、あなたは物体でないとするば、どのようにして感覚的であるのでしょうか。すべてができるのではないとするば、どうして全能なのでしょう。それに、憐れみ深く、同時に感情に流されないのでしょうか。物的なものだけが感覚的であるのなら、——というのも感覚は物体にかかわり、物体においてあるからですが——、あなたは物体ではなく、物体より優れているところの最高の霊であるのに、どうして感覚的なのでしょう。

しかし感覚することは認識することに他ならないか、認識するために他ならないのであれば、——というのも感覚する人はそれぞれの感覚の固有性にしたがって認識するのであり、たとえば視覚を通して色を、味覚を通して味をというように認識するのですから、——何であれ何らかの仕方で認識しているものは何らかの仕方で感覚していると言われても不適切ではないのです。それゆえ、主よ、あなたは物体ではありませんが、動物が身体感覚によって認識するという仕方でなく、最高度にすべてを認識しておられるという仕方で最高度に感覚的なのです。

第七章

では、あなたは、すべてができるのでないとすれば、どうして全能なのでしょう。あなたは害を受けることができず、嘘をつくこともできず、偽を真とすることもできず、これはなされたことをなされなかったことにするなど、他にもたくさんある類似のこの場合と同じです。それなのに、どうしてあなたはすべてができるのでしょうか。

それとも、これらができるのは能力ではなく無能力なのでしょう。というのは、これらができるのは、自分にとってためにならないこと、してはならないことができることからです。このようなことは、よりできればできるほど、反対と逆転がそのものに対して力を発揮し、自身はそれに対抗することがよりできないことになります。ですから、そのようなことができるものは、能力によってできるのではなく、無能力によってできるのです。自らができるからできると言われるのではなく、自らの無能力によって他のものが自分に対してできるようにするから、できると言われるのです。あるいは何か本来的ではない語り方によってできると言われるのです。多くのことが非本来的に言われますがそれと同じことです。たとえば、われわれが「あらぬ」の代わりに「ある」とおき、「しない」の代わりに、あるいは「何一つしない」の代わりに「する」とおくようなものです。じっさいわれわれは、何かがあることを否定しているひとに言うことがよくあります。きみがそうあると言ったとおきだ、と。しかしむしろ、「きみがそうないと言ったとおきない」というのが本来の言い方でしょう。同じようにこういうこともあります。「このひとは座っているが、それはあの人がしているのと同じことだ」とか、「このひとは休んでいるが、それは

あの人がしているのと同じことだ」と。ところが、「座っている」ことは、何もしていないことであり、「休んでいる」ことも何もしていないことなのです。これと同じように、誰かが、自分のためにならないこと、あるいはしてはならないことをしたりされたりする力をもっていると言われるとき、力によって無力のことが知解されています。なぜなら、そのような力をもっていればいるほど、反対と逆転が彼に対して力をもっているのであり、彼はそれらに対して無力なのです。それゆえ、主なる神、あなたがより真に全能であるのは、無力によってできることが何もなく、あなたに逆らうものが何もないからです。

第八章

しかし、あなたはどのようにして憐れみ深く同時に感情に流されないのでしょうか。というのはもし、感情に流されないのであれば、同情することはありません。同情しないのであれば、あなたには憐れなひとに同情して憐れみの心をもつことはありません。そしてこれが憐れみ深くあることです。しかしあなたが憐れみ深くないのであれば、どうして憐れなひとびとにあれほどの慰めがあるのでしょうか。

ではどのようにして主よ、あなたは憐れみ深くあるとともに憐れみ深くないのでしょうか。主よ、それはわれわれとの関係では憐れみ深い、あなた自身との関係では憐れみ深くないからではありませんか。たしかにあなたはわれわれの感覚との関係では憐れみ深いが、あなたご自身の感覚との関係では憐れみ深くありません。というのは、あなたがわれわれ憐れなものたちを顧みられるとき、われわれは憐れみという結果を感じますが、あなたがそのような気持ちを感じることはありません。ですからあなたが憐れみ深いのは、憐れなものを救い、あなたの罪人を赦されるからです。そして憐れみ深くないのは、どのような憐れさに対しても同じ憐れな気持ちになることはないからです。

第九章

しかし、あなたは全体として正しく、また最高に正しいとすれば、いったいどうして悪いものたちを赦されるのでしょうか。じっさい、全体としてまた最高に正しい方が正しくないことをされることがあるでしょうか。それにまた、永遠の死を報いとして得たものにとこしえの^{いのち}生命を与えることが、どのような正義なのでしょう。ですから、恵みの神、善いものたちにも悪いものたちにも恵みの[善い]神、それが正しいことでなかったなら、そしてあなたは正しくないことをされないのであれば、どうしてあなたは悪いものたちを救われるのでしょうか。

あるいはあなたの恵み深さは捉えがたく、このことはあなたがそこに住んでおられる近づきたい光のなかに隠れているのでしょうか。じっさい、あなたの憐れみの水脈がそこから注ぎ流れる泉は、あなたの恵み深さの一番深く一番閉ざされた所に隠れています。あなたは全体としてまた最高に正しい方ですが、全体として最高に善い方なので、悪いものたちにも恵み深いのでしょうか。もし悪いもの

には恵み深くなかったなら、あなたはより少なく善い方であることになったでしょう。というのは、善いものたちにも悪いものたちにも恵み深い方のほうが、善いものたちにだけ恵み深いより、善い方だからです。悪いものたちに罰して赦すことで善い方は、たんに罰することで善いより、善い方だからです。だから、あなたは全体として最高に善いがゆえに、憐れみ深いのです。

なぜ善いものたちに善いものを、悪いものたちに悪いものを報われるのかと思うひとがいるかもしれませんが、しかし、真に驚くべきは、なぜあなたは全体として正しいものであり何も欠いておられないのに、悪いものたち咎あるものたちに善いものを与えられるのかということです。あなたの善さのなんと深いことか、神よ。あなたがどうして憐れみ深いかは見ることができるのですが、見通すことはできないのです。流れがどこからくるかは見ることができるのですが、流れの発する源まで見渡すことはできないのです。あなたがあなたの罪人にとっても信頼できる方であることはあなたの豊かな善性のおかげです。しかしどうしてそうなのかという理由はあなたの善性の高みに隠れています。じっさいあなたは、善いものたちに善いものを悪いものたちに悪いものを、あなたの善性によって報われますが、正義というあり方がこのことを必要としていると思われまふ。これに対し、悪いものたちに善いものを報われるとき、あなたは最高に善い方ですからこのことをしようと望まれたことは知られていますが、最高に正しい方なのにそれを望まれることができたのが不思議なのです。

憐れみよ、あなたはなんとという豊かな甘美から、甘美な豊かさから、わたしたちのため流れ出て来られたのか。神の善性の大きさよ、罪人たちは、どのような愛であなたを愛さなければならないことでしょうか。あなたが正しいものたちを救われるとき、正義も彼らともありますが、罪人たちを自由にされるとき、正義は彼らを罰しているのですから。そのとき、正しいものたちには、行いの責が味方しますが、罪人たちには行いの責が敵対します。そのとき、あなたは、正しいものたちにはあなたの与えられた善いことを認められるのですが、罪人たちにはあなたの憎む悪いことを赦されます。何というはかりしれない善性か。このようにしてあらゆる知解をあなたは超えておられます。どうかあなたの豊かさから溢れ出た、これほど大きな憐れみが、わたしの上に来るように。あなたから流れ出て、わたしに流れ込むように。あなたの寛大さによっていとおしんでください。正義によって罰しないでください。あなたの憐れみがどうしてあなたの正義と別々でないのか、知解するのは困難であるとしても、信じなければなりません。あなたの善性から溢れ出ることがあなたの正義に反することは決してないからです。あなたの善性は正義なしにはありえません。それどころか正義と完全に一致しています。じっさい、あなたが憐れみ深いのは、あなたが最高に善い方だからであり、あなたが最高に善い方なのは、あなたが最高に正しいからに他ならないとすれば、あなたが憐れみ深いのは、まさしくあなたが最高に正しいからです。正しくかつ恵み深い神よ、わたしを助けてください。わたしはあなたの光を求めています。わたしを助け、自分の言っていることを知解できるようにしてください。

いずれにしても、あなたが憐れみ深いのは、まこと、あなたが正しいからなのです。

ではあなたの憐れみはあなたの正義から生まれるのでしょうか。あなたは正義によって悪いものたちをいとおしまれるのでしょうか。もしそうであるとすれば、主よ、もしそうであるとすれば、どのようにしてなのかをわたしに教えてください。それとも、あなたはそのような仕方で善いことが正しいことで、それより善いあなたは知解できず、あなたはそのような仕方で力強い業をなされることが正しいことで、それより力あるあなたは考えられえないのでしょうか。これ以上に正しいことがあるのでしょうか。もしあなたが報いることによってだけ善く、いとおしむことによって善いのでなければ、そのようなことはなかったでしょう。もしあなたが善くないものたちからだけ善いものたちをつくられ、悪いものたちから善いものをつくられるのでなかったら、そのようなことはなかったでしょう。しかも、正しくない仕方でなされたことは、なされてならなかったのであり、なされてならなかったことは、不正になされたのです。ですから、あなたが悪いものたちを憐れまれることが正しくなかったのであれば、あなたは憐れむべきではなく、あなたが憐れむべきではなかったとすれば、あなたが憐れまれたのは不正だったのです。しかしこのように言うのは不敬虔なことですから、あなたが悪いものたちを憐れまれるのは正しいことだと信じなければなりません。

第十章

しかしあなたが悪いものたちを罰せられるのも正しいことです。善いものたちが善いことを、悪いものたちが悪いことを受けとることほど正しいことはありません。では、どのようにしてあなたが悪いものたちを罰することも正しく、あなたが悪いものたちをいとおしむことも正しいのでしょうか。あるいは悪いものたちを正しく罰せられるときと、悪いものたちを正しくいとおしまれるときとは、「正しく」ということが異なるのでしょうか。というのは、あなたが悪いものたちを罰せられるとき、それが正しいのは彼らの行いの責にふさわしいからであり、あなたが悪いものたちをいとおしまれるとき、それが正しいのは彼らの行いの責にふさわしいからではなく、あなたの善性〔恵み深さ〕にかなっているからです。悪いものたちをいとおしむとき、あなたはわたしたちによればではなく、あなたによれば正しいのであり、それはあなたが憐れみ深いのがわたしたちによればであって、あなたによればでないのと同じことです。滅ぼして正しかったわたしたちを救うとき、ちょうどあなたが憐れみ深いのは、あなたが気持ちを動かしたからではなく、わたしたちがあなたの働きの結果を感じたからであるのと同じように、われわれに負債を返すからではなく、最高に善いあなたにふさわしいことをされるから正しいのです。このようにして、あなたが正しく罰せられ、正しくいとおしまれるとしても矛盾はありません。

第十一章

しかし主よ、もしかして悪いものたちを罰することは、あなたによれば正しくないのでしょうか。あなたが、それより正しくあることは考えられえないほど正しくあるのは、正しいことです。しかし、あなたがたんに善いものたちに善いことを報いるだけで、悪いものたちに悪いことを報いることはなかったとすれば、そのような仕方で正しくはなかったでしょう。善いものたちにも悪いものたちにもその行いの責に報いる方は、善いものたちだけに報いる方より、正しいからです。ですから、正しくかつ慈愛の主よ、あなたは罰せられるときも、慈しまれるときも、あなたによって正しいことです。ですから、まさしく、「主のすべての道は憐れみと真理¹」であり、しかも「主はご自身の道のすべてにおいて正しい²」のです。そしてもちろん、矛盾はありません。罰しようと望まれるものたちを救われることは正しいことではなく、いとおしもうと望まれるものたちを罰に定めることは正しいことではないからです。あなたの望まれることだけが正しく、あなたの望まれないことは正しくないことです。このようにしてあなたの正義からあなたの憐れみが生まれます。あなたが、いとおしむことによっても善い方であるという仕方で善い方であるのは、正しいことだからです。そしておそらく、このことが、最高に正しい方が悪いものたちにも善いことを望まれる理由です。けれども、なんとか理解されることであれば、問いたいのです。どうしてあなたは悪いものたちを救おうと望まれることができるのでしょうか。すくなくとも、もしあなたが、同じような悪いものたちのなかで、あのものたちではなくこのものたちを最高の善性によって救われたり、このものたちではなくあのものたちを最高の正義によって罰せられたりするなら、これはどのような理由によっても説明できることはありません。

ですから、あなたは真に感動的であり、全能であり、憐れみ深く、動じることがありませんが、それはあなたが、生ける方、知恵ある方、善い方、至福なる方、永遠なる方、およそ「ない」より「ある」ほうが善いことのすべてであると同じような仕方でよいのです。

第十二章

しかし、あなたが何であるにせよ、他のものによってではなく、あなたご自身によってそれであることはたしかです。ですから、あなたは、あなたがそれによって生きているところの生であり、あなたがそれによって知恵あるところの知恵であり、あなたがそれによ

¹ 『詩編』24[25],10. 共同訳では「その契約と定めを守る人にとって／主の道はすべて、慈しみとまこと。」とある。

² 『詩編』144[145],17. 共同訳では「主の道はことごとく正しく 御業は慈しみを示しています。」

って善いものたちにも悪いものたちにも善いところの善性です。これに類する他のことについても同じことです。

第十三章

しかし、何らかの程度で場所や時間のなかにあるものはすべて、場所や時間のいかなる法にも制約されていないものより劣っています [より小さな存在です]。ということは、あなたより大きなものは何もないのですから、いかなる場所も時間もあなたを制約することはなく、あなたは至るところ常に存在しておられます。このことはただあなたについてだけに言えることです。あなただけが限界をもたず、永遠です。ではどうしてあなた以外の霊的存在者も限界をもたず、永遠であると言われるのでしょうか。

あなただけが永遠なのは、すべてのもののなかであなただけが、存在をやめることがないのと同じように、存在し始めることもないからです。しかしどうしてあなただけが、限界をもたないのでしょうか。あるいはつくられた霊的存在者はあなたと比べれば限界をもつが、物体と比べれば限界をもたないのでしょうか。じっさい、どこかに全体としてあるとき、同時に他のところにあることができないものは、あらゆる点で限界をもっていますが、これは物的なものにだけ見られることです。これに対し、同時に至るところ全体としてあるものは限界をもちませんが、このことはあなたについてだけ知解されることです。ところが、どこかに全体としてあるときも、同時に他のところに全体としてあることができるが、ただし至るところにあるわけではないものは、限界をもっていると同時に限界をもっていません。このことはつくられた霊的存在者に認められることです。じっさい、魂が全体として、自分の身体のそれぞれの部分になかったとすれば、魂は身体のそれぞれの部分において、全体として感覚することはなかったでしょう。それゆえ、あなたは、主よ、類ない仕方でもたず永遠ですが、あなた以外の霊的造物も限界をもたず永遠なのです。

© Sumio Nakagawa